

パーソナルリカバリー×ソーシャルフットボール！ ー当事者が熱中する活動について理解を深め、語り合おうー

○大江 真人¹⁾、長山 豊¹⁾、山口 千夏¹⁾、大江 真吾²⁾、相上 律子^{3,4)}、別宗 利哉⁵⁾、川端 浩頌⁶⁾、山田 浩史⁶⁾、中野 喜文⁶⁾、石田 嵩人⁶⁾

1)金沢医科大学 看護学部、2)石川県立看護大学 看護学部、3)公立小松大学 保健医療学部 看護学科、4)金沢大学大学院医薬保健学総合研究科、5)GENESIS株式会社/ヴィンセドール ルミナス代表 兼 総監督、6)ヴィンセドール ルミナス

【背景】 ソーシャルフットボール（以下、SF）とは、精神障害をもつ人たち（以下、当事者）のフットサルです。これまで、当事者はもともと運動習慣が少ないといわれてきました。その一方で、当事者がスポーツを行うことは生活リズムの改善、ADLの維持や向上に貢献し、症状の安定に寄与することが明らかにされています。ただ単に「スポーツを行う」といった意味だけではない側面がSFにはあります。それは、競技性スポーツであることです。これまでの研究では、競技性スポーツは、リカバリーを促進する可能性が考えられること、当事者が競技志向・向上心を目的としながらも気持ちの面での好影響も感じていたことなどが研究から明らかにされています。「当事者が誇りや生きがいを感じる活動」と聞いて私がイメージすることは何でしょうか。先行研究からは、私たちが普段提供している精神保健福祉サービスは、当事者が他者とのかかわりや居場所感、夢や希望を持つことにつながるといった知見が明らかにされています。しかし、皆さんがイメージした活動は、日常生活における趣味活動や福祉サービス等において提供されるものを「誇りや生きがいを感じる活動」として捉えたものではないでしょうか。その点が、積極的に選択して取り組む競技性のあるSFを行っていることとの違いではないかと考えています。精神保健福祉領域では、症状の減少や機能の向上を図る意味で用いる「臨床的リカバリー」で

はなく、当事者自身が決めた希望する人生の到達を目指す個々の人生の旅路（プロセス・過程）である「パーソナルリカバリー」が着目されています。SFを行う選手たちがどのようにパーソナルリカバリーの過程を歩んでいるのか理解を深め、スポーツを通じたパーソナルリカバリーのあり方について考える機会として、積極的な意見交換を行いたいと考えています。【目的】 SFについて理解を深め、リカバリーを促進する活動が当事者にとってどのような意味をもつのか、これまで私たちが当事者を支援する際に重視していた視点との違いなどについて理解を深め、考えることを目指しましょう。【進め方】 本ワークショップでは、「パーソナルリカバリー×ソーシャルフットボール！」の視点で、SFの紹介、SF選手たちからのリカバリーストーリーの紹介、SFに関連する研究の紹介、選手たちとの対話・意見交換を行います。その内容から、SFなどの競技性スポーツ・誇りや生きがいを感じるができる活動を活用して、当事者のリカバリーに必要なこと、看護職としてのかかわり方を見出したいと考えていきたいです。【倫理的配慮】 本ワークショップで語られた内容については、参加者の個人情報に配慮し、口外しないことをアナウンスします。ワークショップ内が、自由で安全に意見交換ができる場となるよう、配慮をしながら進行します。